

JAPANESE MILITARY UNIFORMS 1841 ~ 1929 From the fall of the Shogunate to the Russo-Japanese War

新装版 日本の軍装

幕末から日露戦争

中西立太 著
Text and Illustrations by
Ritta Nakanishi



JAPANESE MILITARY UNIFORMS 1841 ~ 1929 From the fall of the Shogunate to the Russo-Japanese War

新装版
日本の軍装

幕末から日露戦争

中西立太 著

隊中一第兵騎備後團師一第
者身出京東



まえがき

『日本の軍装 -幕末から日露戦争-』 発刊に寄せて

イラストレーター 高荷義之

Yoshiyuki Takani (Illustrator)

中西さんも私もイラストレーターです。

この仕事は注文に応じ色々な風景、風俗、物体を素早く仕上げなければなりません。

歴史的な場面ではこれに時代考証というやっかいな要素が加わります。その時代に適した絵を描くのは大変むずかしい作業ですが、できるだけ誤りの少ないように努めます。

理想を云えばそこに描かれている情報の何十倍もの知識が本当は必要だと思います。それができれば見る人を十分に満足させる作品と云えましょう。

一枚だけの絵でしたら資料と乏しい知識を総動員してなんとかつじつまを合わせることもできますが、或る時代の或ることを系統的にまとめ上げるのは大層な作業で画家の仕事を超え、学者の範囲に入るでしょう。

私を知る青年、中西さんは優秀なマルチイラストレーターで、特段一つのことだけに凝ることのない人だったと記憶しています。いつの頃から日本歴史が研究テーマになられたらしく、色々なメディアに結果を作品として発表されています。中でも古今の軍装に特に精通され、名著『日本の軍装』も執筆されています。フィギュア模型の歴史の永い欧米では立派な服飾図鑑や、カラフルな時期別軍装画集が多数刊行されていますが、我が国ではこの種の本は少なく、特に近代軍装は敗戦によるアレルギーによりほとんど無いと云ってもよいでしょう。有るにしても著者の指示で図が描かれるものがほとんどで、画家が自ら調査、研究し隅々までごまかしの無い本を著されたのはこの本が初めてでありましょう。

飛行機も戦車も登場しない地味な日露戦争は他のマスコミでは取り上げ難いテーマですが、武器を持った人間同士がぶつかり合う最後の戦争は模型の世界では絶好のテーマと思います。

著者、積年の努力によって日本国の存亡をかけたこの重大な意義を持つ戦争に参加した将兵の姿を、断片的でなくトータルに見られる幸せを読者と共に嬉しく思います。

编者から：

上掲の一文は『改訂版 日本の軍装 幕末から日露戦争』に寄せられた高荷義之氏の推薦文で、同じ画家という立場から見た中西氏評としては貴重なものと言える。

高荷氏は1935年12月生まれ（中西氏とは1歳違い）、群馬県前橋市出身。群馬県立前橋高等学校卒業後の1954年、挿画家を志し小松崎茂氏に弟子入りして同年11月に独立、1955年に『中学生の友』3月号の挿絵でデビューした。1960年代に戦記ブームが起きると戦車・軍艦・航空機などのイラストでその人気を不動のものとした。同じ頃からプラモデルのボックスアートを手がけるようになり、タミヤをはじめとするスケールモデルメーカーだけでなく、バンダイなどではサンライズ系のリアルロボット、またアリーのマクロスなどを手がけて幅広いファンを得ている。古い著書には『電撃! ドイツ戦車軍団』主婦と生活社(21世紀WIDEボックス)、1972年7月刊、近著には『超時空要塞マクロス』パッケージアート集』小学館クリエイティブ、2023年2月刊などがある。

2023年7月現在も健在。

昭和ロマン館館長 日本出版美術家連盟理事 根本圭助

Keisuke NEMOTO (Illustrator)

“立太さん”、そう親しく呼んでの交流も、早いもので半世紀に届こうとしている。

立太さんは剛直な理論家であり、地味で誠実な人柄ながら、大変な情熱家である。

少年雑誌の世界で活躍し、プラモデルのボックスアートでも人気画家だったが、後年「歴史復元画」というとてつもない至難な仕事と真正面から向き合うことになったのも、該博な知識と、画家としての蓄積された実力あってのことである。

昨年からは長野県の古い宿場町奈良井に、私設のギャラリーを開設し、これから力作を順次展示していくそうである。

こうした地道な努力は、必ずや近い将来、見事に開花、結実するであろうことを、私は信じて疑わない。

私が館長を務める千葉県新松戸の『昭和ロマン館』は小松崎茂先生と少女画家、松本かつじ先生の作品のコレクションが中心だが、立太さんの絵は高荷義之さんの絵と共に館の大事な柱となっている。

立太さんの良きライバル高荷義之さんとも“よっちゃん”と親しく呼んで半世紀のおつき合いをいただいている。

この二人と共に、梶田達二、吉田郁也、長岡秀星、伊藤展安、平野光一などの実力派イラストレーターが、毎月各月刊誌上で力作を競っていた戦後イラストレーションの黄金期を共に生きた者として、館内に展示されたこの人達の作品に限りない親しみを覚えるこの頃である。

そして、このような人達と長い交流を得たことに心から感謝の念が湧いてくる。

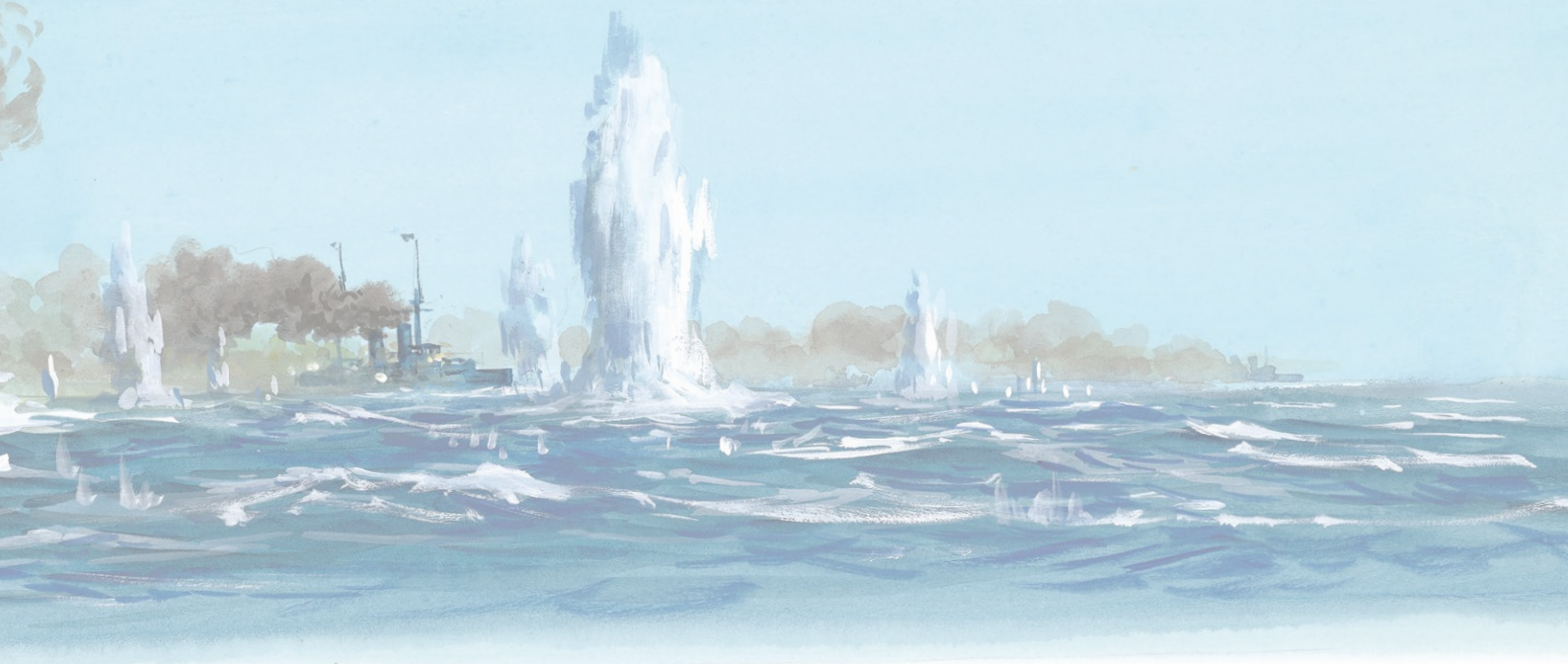
今回、その得難い友人のひとり、立太さんの『日本の軍装 一幕末から日露戦争?』というカラフルな画集で、私の座右宝がまたひとつ、思い出もまたひとつ増えることになる。

なんとも嬉しく、心躍る思いである。

编者から：

上掲の文章も『改訂版 日本の軍装 幕末から日露戦争』に寄せられた、根本圭助氏による推薦文。左ページの高荷氏と同じく根本氏も1935年生まれで、小松崎茂氏の門下生であった絵描きである。根本氏はTVキャラクターを使った絵本やグッズに使用されるイラストに多く起用され、その方面の第一人者と目されていた人物。晩年は、往年の挿絵などを展示する「昭和ロマン館」（現在は林館）の館長を務める傍ら、講演や小松崎茂氏関連の著作の出版を精力的にこなした。

2022年5月没。



明治期の日本陸海軍の階級呼称について

戊辰戦争が集結した明治2（1869）年7月、従来あった軍務官を廃止して兵部省を創設した明治新政府は早くも軍制の整備に乗り出し、まずは陸海軍に大将、中将、少将の官階（いわゆる階級）を設け、翌明治3年には大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、曹長、権曹長を設置した。

大政奉還からわずか2年、まだ武士が大小を帯刀し、多くの日本国民がチョンマゲを結っていたこの時期に、すでに昭和に通ずる階級が固まりつつあったのは驚きである。

この時点で陸軍はフランス式の、海軍はイギリス式の軍制にならって整備を進めることとなっていたが、特に海軍ではイギリスの貴族然とした組織体系に引っ張られ、「特務士官」という他の国には見られない人事形態を創出する結果となる。

例えば、日本陸軍では兵から下士官となった人間を士官に登用する少尉候補者という制度があり、これによって陸軍士官学校を卒業した者は以後、士官学校生徒出身者と同列に扱われたが、日本海軍では兵から下士官となった者は、海軍兵学校の選修学生を卒業した後でも特務士官として扱われた。まれに特務大尉から少佐（特務はつかない正規の少佐）に任用されることはあったが、これが兵出身者の進級できる最高の階級となっている。

下の表で海軍の方だけ、階級の列が2列となっているのはこのためである。

■明治期と昭和期の陸海軍の階級呼称の比較

陸軍					海軍			
明治6年頃	明治35年頃	昭和時代	明治6年以降 （※1）	陸軍昭和6年以降 海軍大正9年以降	明治22年頃	昭和時代		
大将	大将	大将	将官	士官	大将	大将		
中将	中将	中将			中将	中将		
少将	少将	少将			少将	少将		
大佐	大佐	大佐	上長官	佐官	大佐	大佐		
中佐	中佐	中佐			中佐	中佐		
少佐	少佐	少佐			少佐	少佐		
大尉	大尉	大尉	士官	尉官	大尉	大尉	特務大尉	
中尉	中尉	中尉			中尉	中尉	特務中尉	
少尉	少尉	少尉			少尉	少尉	兵曹長（※3）	少尉
上等監護	特務曹長（※2）	准尉	准士官	准士官	兵曹長（※4）	兵曹長	昭和17年11月～	
曹長	曹長	曹長	下士	下士官		一等兵曹	一等兵曹	上等兵曹
権曹長	軍曹	軍曹				二等兵曹	二等兵曹	一等兵曹
軍曹	伍長	伍長				三等兵曹	三等兵曹	二等兵曹
一等卒	上等兵	兵長	卒	兵		一等水兵	一等水兵	水兵長
二等卒	二等兵	上等兵				二等水兵	二等水兵	上等水兵
	三等兵	一等兵				三等水兵	三等水兵	一等水兵
		二等兵				四等水兵	四等水兵	二等水兵
					五等水兵（※5）			

※1：日本陸海軍でそれぞれ階級制度が整備されたが、明治6年には双方で将官、上長官、士官、下士、卒という大分類ができた。海軍については大正9年以降に少尉以上を士官と総称する。准士官が設置されたのは陸軍が明治8年、海軍が明治9年、日本陸軍で下士を「下士官」と、卒を「兵」と呼称変更するのは昭和6年11月。

※2：日本陸軍では砲兵と工兵、軍楽兵以外の准士官が長らく空白であったが、明治27年に特務曹長として設置された。

※3：昭和時代と違い、この時代の日本海軍では兵曹長は兵からたたき上げの士官を指し、特選により中尉に任官させることとなっていた。大正4年にこれを士官から新設の特務士官という分類に変更、大正9年4月1日の改正で特務大尉、特務中尉、特務少尉が設置され、現行の兵曹長はひとまず特務少尉とされた。またこの際、下士が「下士官」に、卒が「兵」の呼称となり、下士卒と呼ばれていた彼らを「下士官兵」と呼称するようになった。

※4：上等兵曹という呼称は昭和17年11月の変更により誕生した階級として知られるが、明治時代にも使われていた。ただし、この頃の上等兵曹は准士官で、大正9年4月1日の改正で兵曹長と変わった。

※5：五等水兵は明治21年12月に、それまで五等卒と分類されていた一等若水兵、二等若水兵（これはイギリス海軍に置いた階級であった）のうち一等若水兵を廃止し、二等若水兵を改称したもの。その後、大正9年4月1日の改正で、従来の四等水兵が三等水兵に統合、それまでの五等水兵が四等水兵となる。

目次

CONTENTS

◆近代天皇の軍装 6 Full military dress for an emperor of modern Japan	◆明治1 御親兵から国軍へ 38 From the Imperial Guards to the Imperial Army
◆幕末1 幕府陸軍(1) 徳川家 10 The Army of the Tokugawa Shogunate (1) The Tokugawa Family	明治4年制定の軍装 40 Army uniforms introduced in 1871
幕府講武所(幕軍士官学校) 12 Koubusho - the Tokugawa Shogunate's military academy	◆明治2 国軍創設期 42 The founding period of the Imperial Army
◆幕末2 幕府陸軍(2) 14 The Army of the Tokugawa Shogunate (2)	幕末～明治の小銃の変遷 44 Rifles used in the last days of the Shogunate and early Meiji period
幕末、歩・騎兵の装具 16 Arms and uniforms of the Shogunate's infantry and cavalrymen	◆明治3 歩兵士官正装 46 Infantry officers' full dress uniforms
◆幕末3 幕府側各藩兵 18 Soldiers of clans supporting the Shogunate	◆明治4 歩兵士官軍装、略装 50 Infantry officers' service dress uniforms
東征軍と各藩の袖印 20 Sleeve stripes of Imperial Court Troops and clans who opposed the Shogunate	◆明治5 歩兵、下士官、兵卒 54 Infantry, NCOs & Privates
◆幕末4 朝廷兵と各藩兵(薩摩兵、長州兵) 22 Soldiers of the Imperial Court and the Satsuma and Choushuu clans	◆明治6 騎兵(1) 58 Cavalry (1)
東征軍と幕軍 24 Troops of the Imperial Court and the Tokugawa Shogunate	◆明治7 騎兵(2) [近衛騎兵] 62 Cavalry (2) [Imperial Guards]
◆幕末5 幕府海軍から日本海軍へ 26 From the Shogunate's Navy to the Japanese Navy	騎兵用兵器 64 Arms of the cavalry
要塞砲の発射まで 28 Operation of a garrison gun	◆明治8 憲兵、軍医、軍楽隊 66 Military police, Army surgeons and Military bands
◆幕末6 幕末維新の兵器、火砲 30 Guns in the last days of the Tokugawa Shogunate	◆明治9 海軍士官、正服、礼服、軍服 70 Navy officers' full and service dress uniforms
前装砲の装弾から発射まで 32 Shogunate artillery firing procedures	◆明治10 海軍士官、通常礼装、軍服 74 Navy officers' standard uniforms
◆幕末7 幕末維新の小火器 34 Small arms in the last days of the Tokugawa Shogunate	◆明治11 海軍准士官、下士官、卒 78 Navy petty officer and seaman uniforms
拳銃の種類と操作法 36 Classification and usage of pistols	◆明治12 海軍軍楽隊、海兵隊 82 Navy band and Marine uniforms
	あとがき 86 AFTER WORD

序章

Preface

近代天皇の軍装

Full military dress for an emperor of modern Japan

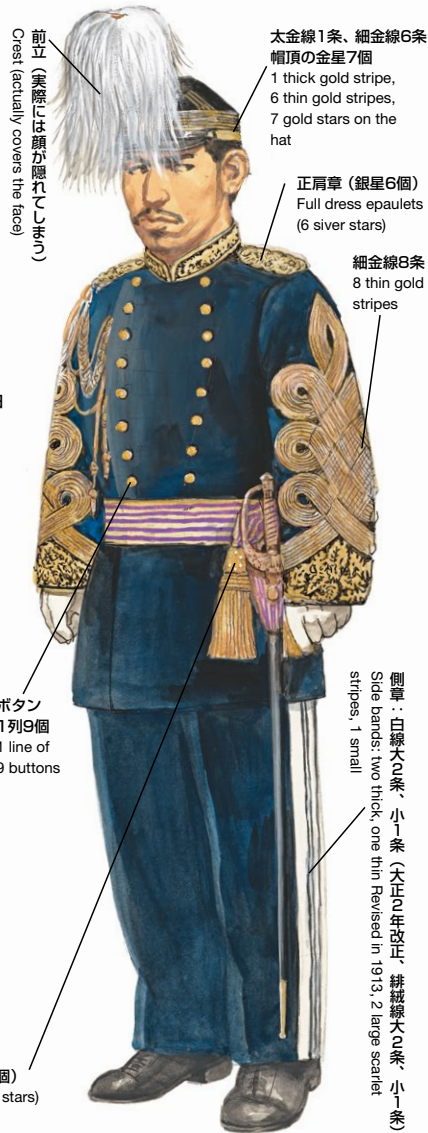
天皇陛下は昭和20（1945）年までは大日本帝国陸海軍の最高統率者であった。

天皇の軍装の基本形は陸海軍共に大将の服制と同じだが、肩章、側章など各種の装飾に菊花の入った独自の形式となっていた。

The Emperor was the supreme commander of the Imperial Japanese Army and Navy until 1945. The Emperor's dress is the same as that of an Army general or Navy admiral, with the exception that all the different types of epaulets and sleeve emblems feature the unique Imperial chrysanthemum design.



正装の明治天皇。明治19年7月6日制定の陸軍正衣姿で、首にかけているのは最高位の勲章、頸飾である。天皇用の飾緒の結びは5つとなっている。
The Meiji Emperor in full dress uniform. Following regulations established on July 7 1886, the highest decoration is worn around the neck. The Emperor's citation cords consist of 5 cords.



明治天皇

The Emperor Meiji

明治13年10月11日
制定、正衣、袴
October 11 1880
regulation full
dress uniform and
trousers



銀星6個
6 silver stars

飾帯（銀星6個）
Sash (6 silver stars)



大正2年11月制定、正帽
November 1913 regulation
dress hat



大正2年11月14日改正、正肩章
Full dress epaulets, revised on
November 14 1913



大正天皇

The Emperor Taisho

大正2年11月改正の陸軍正衣袴の大正天皇。袖章は細金線8条。
The Taisho Emperor wearing the full dress uniform of the Army as revised in November of 1913. The sleeve chevrons consist of 8 thin gold stripes.

昭和天皇

The Emperor Showa

天皇の軍装は、陸・海ともに大将の軍服の袖章、側章などを一筋増やしたり、肩章、襟章、ベルトの前章などに菊花をつけた形であった。

この軍服が正式に廃止されたのは昭和20年11月30日であった。恐らく昭和天皇は、11月3日の旧明治節（明治天皇崩御記念日）の日、明治天皇の霊前で国軍の崩壊を謝罪すると共に、改めて国民と共に平和国家建設に務めることを誓ったのではないだろうか。翌年2月から平服姿の天皇の全国巡幸が始まる。

The Emperor's dress was the same as that of an Army general or Navy admiral, with the exceptions of a single stripe added to the sleeve chevrons and side bands and the addition of the Imperial chrysanthemum to the epaulets, collar ensigns, and belt buckle. This uniform was officially abolished on November 30 1945. It is thought that on November 3 (the anniversary of the death of the Meiji Emperor) the Showa Emperor went to the shrine of the Meiji Emperor to both apologize for the collapse of the Japanese military and to pledge himself and the Japanese people to the creation of Japan as a nation of peace. In February of the following year, the Emperor began touring the nation in civilian clothes.

大正2年11月14日制定の海軍式通常礼衣（および軍帽）。 November 14 1913 regulation Naval service ceremonial dress (and Naval cap)



大正2年11月14日制定の海軍式正衣と正帽。礼衣は通常礼衣（右図）に正帽と正肩章をつける。 The full dress uniform and hat of the Navy, as established on November 14 1913. Ceremonial dress was service ceremonial dress (right illustration) with the addition of a dress hat and dress epaulets.



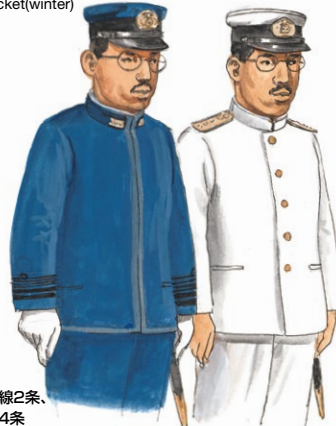
陸軍歩兵大佐姿の昭和天皇

The Showa Emperor in the full dress of Colonel of the infantry.

御成婚時の軍装。天皇即位前は元帥まで通常の軍装だが、即位後、明治5年制では、上衣の袖と袴の側章が大2条、小2条となりボタンが菊花となり、聖上大元帥となる。31年制では通常の元帥軍装だが、正肩章の三ツ星の上に菊花が付き、ボタンが菊花となり、大元帥陛下となる。

It was the military full dress at his wedding. During a prince, his full dress was a usual military full dress ranked up to a Marshal. After ascending the throne, it was the full dress of a Commander of Chief. i.e. model 1872: sleeves and trousers had 2 thick stripes and 2 thin ones with chrysanthemum flower shaped buttons, model 1893: chrysanthemum flower was added on the three stars epaulette of the above.

大正2年11月制定、海軍第1種軍衣（冬） November 1913 regulation Navy No. 1 jacket(winter)



袖太線2条、細線4条 2 rows of thick sleeve stripes, 4 rows of thin sleeve stripes

海軍第2種軍衣（夏） Navy No. 2 jacket (summer)

大正2年11月制定、軍衣 November 1913 regulation jacket



昭和18年10月制定、軍衣 October 1943 jacket



袖細線4条、金星、大型襟章 4 rows of thin sleeve stripes, gold stars, large collar ensign

陸軍式刀帯前金具 Army sword belt buckle



各種刀帯のバックルはすべて菊花章入り All sword belt buckle types featured the chrysanthemum insignia

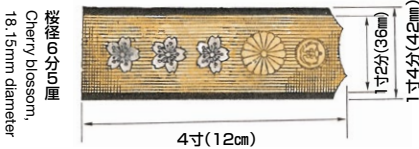
海軍式剣帯前金具 Navy sword belt buckle



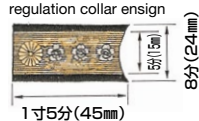
大正2年11月14日制定、肩章（海軍式） November 14 1913 regulation epaulets (Navy)



昭和18年2月5日改正、襟章（海軍式） Collar Ensign (Navy) revised February 5 1943

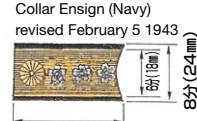


大正8年10月18日制定、襟章 October 18 1919 regulation collar ensign



銀色桜花、径2分5厘 Chrysanthemum insignia, 9mm diameter

昭和18年2月5日改正、肩章（海軍式） Collar Ensign (Navy) revised February 5 1943



銀色桜花、径2分5厘 Silver cherry blossom, 6.15mm diameter

大正2年11月14日制定、正肩章（海軍式） November 14 1913 regulation full dress epaulets (Navy)

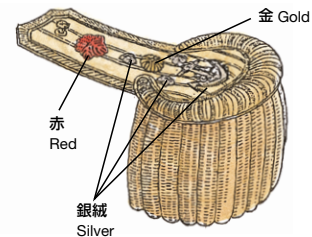


大正2年11月14日制定、軍衣肩章（陸軍式） November 14 1913 regulation jacket epaulets (Army)



金色菊花紋章、径5分 Gold chrysanthemum insignia, 15mm diameter

昭和2年12月19日改正、正肩章（海軍式） Full dress epaulets (Navy) revised on December 19 1927.



昭和13年5月31日制定、襟章（陸軍式） May 31 1938 regulation collar ensign (Army)



金色菊花紋章、径3分、銀色星章、径3分 Gold chrysanthemum insignia, 9mm diameter Silver star insignia, 9mm diameter

昭和18年10月12日改正、襟章（陸軍式） October 12 1943 regulation collar ensign (Army)



金色菊花紋章、3分6厘、銀色星章、径3分6厘 Gold chrysanthemum insignia, 9.18mm diameter Silver star insignia, 9.18mm diameter

日本の軍装、幕末から日露戦争に至るその背景

幕末はまだ私兵集団同士の戦争

鎌倉時代の到来で主な為政者が武家政権となり、室町時代、戦国時代、太閤秀吉による天下統一を経て、徳川政権による江戸時代となっても、基本的に日本国の軍事力というのは幕府と諸藩・諸大名が有する私兵集団の集合体であった。

江戸時代後期となる1800年代（つまり19世紀）に欧米の洋式船が日本各地に出没するようになり、またアヘン戦争で清国がイギリスに敗北すると徳川幕府は当時国交のあった唯一のヨーロッパの国であるオランダを通じて近代的な軍備を整えるようになる。

それまでの装備は16世紀半ばに種子島に伝来して以来、わが国でガラパゴス的進化を遂げた火縄銃と、それに類する発火形態を持つ大筒（大砲）、そして古来から伝わる弓、刀、槍などの陸戦兵器（江戸時代初期以降、軍艦などの海上戦闘力は存在しない）であったが、ここにいたり、火縄を使わない燧石式、また雷管式発火装置を持つ洋式銃というものが日本国内にお目見えする。

さらにそれが加速したのが、1853年7月8日（旧暦嘉永6年6月3日）の黒船来航である。蒸気軍艦をはじめとする高い軍事力を見せて相手に恐怖を覚えさせ、外交交渉を有利に導く手法（これは当時のアメリカの公式文書にそう書かれている）はのちに砲艦外交と呼ばれるようになるが、これにより幕府は最新の兵器、戦術を導入する傍ら、諸藩にも装備の近代化をあっせんした。

このように江戸時代までの軍備というのは自前で調達するのが当たり前で、その質的優劣や数量のほどはそのまま藩の力を表すバロメーターといえたが、いっぼうで各藩の石高がそのまま軍事力に直結したわけではなく、農地改革や領内の産業育成などで体力をつけ、またより良い武器商人をいかに味方につけるか、また兵器の質を見抜く「目利き」が大きく影響していた（旧式兵器を高値で売りつけるような悪いヤツもいたのだ）。

黒船来航を契機とした開国後、こうした列強諸国の脅威を取り除こうとする攘夷思想が薩摩や長州、水戸をはじめとする雄藩で跋扈し始めるが、それらが薩英戦争や下関戦争で直接対決をすることにより「攘夷よりも、倒幕により日本の政権を奪取する」という尊王倒幕へと切り替わる。

イギリスに負けた薩摩藩はその財力を活かしてイギリスから良質な兵器を大量に購入することに成功、その後成立した薩長同盟により、長州藩にもライフリングを持つ最新式のミニエー銃（ミニエール銃）、

エンピール銃（エンフィールド銃）などの兵器がもたらされ、第二次長州征伐ではライフリングを持たない洋式銃（オランダ語で小銃を表す言葉にちなみゲベール銃、あるいはゲーベル銃と呼ばれた）を装備する幕府側を射程外から射撃して圧倒することとなる。

対する幕府側もフランスに急接近、洋式軍装や装備を導入して最新式のシャスポー銃などを購入するほか、洋式軍艦を多数購入、建造していった。

当初は公武合体（天皇を主体とする公家政権と徳川幕府を主体とする武家政権の連立政権）を目指す考えもあったが、討幕のうへ徳川家を排除しようとする動きは強まり、機を見るに敏だった徳川方の大政奉還により徳川家は政権を返上する。

その後、1868（慶応4）年1月早々に始まった鳥羽伏見の戦いは戊辰戦争の幕開けとなるものであったが、錦の御旗をいただいたとはいえ東征軍（官軍）は各藩の寄せ集め、対する徳川方も各藩の判断で、東征軍へ恭順、あるいは奥羽越前藩同盟を結んで戦うといった形態で、やはり私兵集団の集合体であった。

本書の幕末編で扱っている軍装や兵器はこうした背景のもとに使われていたものである。

近代国家の形成と共に近代軍隊へ

1869年6月（旧暦明治2年5月）に箱館戦争が終わって戊辰戦争が終結すると、欧米諸国の明治新政府に対する見方は確固たるものとなり、また新政府も本腰を入れて内政の整備に注力できるようになった。

軍事力に対しては、まず有力な陸軍を持っていた薩摩・長州・土佐の各藩兵を集めて明治4年に天皇直属の「御親兵」を創設した。戊辰戦争後、過大な藩兵を保有し続けることが負担となっていたこれら各藩にとって、政府がその維持費を捻出するということは新しい概念であったが、これをして近代日本最初の国軍ということができる。

明治新政府はこの「御親兵」の兵力を牽制力（ただし、必ずしも大久保利通や木戸孝允のベクトルは一致していなかったという）として廃藩置県を断行し、古来から続く封建体制を破壊、領主（藩主）から土地と人民を切り離して近代国家的中央集権体制を確立することとなる（この前年の版籍奉還により、形的には土地、人民は各藩主から新政府に返還されていたが、旧藩主がそのまま藩知事として据えられていた）。

明治新政府により創設された兵部省は1871年に東京と大阪とに鎮台



を置き、続いて鎮西鎮台、東北鎮台を設置するが、1872年2月には兵部省が改組されて陸軍省と海軍省が発足した。

1871（明治4）年の廃藩置県の成功によって初期の目的を果たした御親兵は1872年4月（旧暦明治5年3月）に近衛兵と改称、1873年1月には徴兵令による最初の徴兵が実施され（東京鎮台への入営は同年4月。このため1871年に戸籍法が制定され、1872年に最初の近代的戸籍である「壬申戸籍」が作成された）、近代的な国軍が誕生する。以後、近衛兵は皇居の警護を主務とすることになり、1891（明治24）年には陸軍近衛師団となる。

先述のように近衛兵の多くは薩摩、長州、土佐の藩兵（つまり士族）からなっていたが、国民皆兵による新国軍の創設は彼らに不満を抱かせることとなり、参議を務めていた西郷隆盛陸軍大将が征韓論を理由として下野した際には辞職する者が続出、多くがその背中を追うこととなる。

海軍については戊辰戦争が終わった当時、すでに徳川家から割譲された艦船（徳川家に残った艦船は箱館戦争まで喪失）と佐賀藩など一部の雄藩で保有していた艦船が供出されてその基幹となっている。軍艦を駆使して戦うこの当時の海軍は、もっとも近代的な軍隊への転換が早かったと言え、また技能職の多い海軍の人員は志願兵というのはこの頃から昭和まで続く（海軍における徴兵が少ないのは陸軍に徴兵権を抑えられていたためという理由もある）。

1873（明治6）年には国土が東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本の6個の軍管に分けられてそれぞれに1個ずつの鎮台が置かれた。これはもともと国土防衛のためであったが、相次ぐ不平士族の反乱に対する鎮圧拠点としても機能することとなった。

不平士族の反乱は1874年の佐賀の乱のち1876年の廃刀令によって「武士の面目を潰すもの」として苛烈になり、同年の神風連の乱、これと連動した秋月の乱、萩の乱が発生、1877（明治10）年の西南戦争で西郷隆盛が敗れたことで以後、自由民権運動につながっていく。この士族反乱を徴兵された人員からなる国軍が鎮圧したことは特筆されるものであった。

この頃までの歩兵装備は幕末期とさほど変わらず、まだまだシャスポー銃やスペンサー銃なども使用されていたが、それらは全て国費で賄われていたのが大きな違いである。

外地で戦う軍隊へ

士族の反乱が相次ぐ以前、1874年に行われた台湾出兵以後、日本陸軍は次第に国外で戦う軍隊として性質を変えていく。

大きな変化は軍制が当初モデルとしていたフランスではなく、プロイセン式となることである。これは普仏戦争においてフランスが敗れたため、これにより1885（明治18）年にプロイセン王国からメッケル陸軍少佐を陸軍大学校教授として招聘するなどして軍備が進められていった。フランス式の拠点守備重視の性格から、プロイセン式の機動力の高い師団による積極防御を重視するようになるのはこのころのことだ。

ただし、軍装は相変わらずフランスを規範としており、軍帽や階級章に星マークを多用していたのがその名残といえる。

なお、1888（明治21）年になると先述した6つの鎮台は6個の師団に改編、それぞれ第1師団、第2師団、第3師団、第4師団、第5師団、第6師団となってそのまま鎮台のあった地に駐屯（衛戍地といった）し、有事に備えるようになる。1894（明治27年）年の日清戦争時にはこれら常設師団は7個（近衛師団を含む）であったが、日清戦争後の1898（明治31）年には第7師団、第8師団、第9師団、第10師団、第11師団、第12師団の6個常設師団が増設された。

1904（明治37）年に勃発した日露戦争では、第1軍として近衛師団、第2師団、第12師団、第2軍として第3師団、第4師団、第6師団、第3軍として第1師団、第7師団、第9師団、第11師団、第4軍として第5師団、第10師団とすべての常設師団が投入されたため、1905年4月以降、4個師団（第13師団、第14師団、第15師団、第16師団）が内地で新編、拡充された。

日露戦争終結後の1907（明治40）年11月には第17師団、第18師団が創設され、近衛師団を含む19個師団となった。

この後、元号は大正と代わり、1914（大正3年）年に第一次世界大戦の幕開けとなるが、その後も日本陸海軍はおよそ明治期までの服制で昭和の時代を迎えている。

昭和に入ってから、上海事変から太平洋戦争終戦まで、いわゆる15年戦争において見られた変遷や戦訓から生まれた軍装については『新装版 日本の軍装1930-1945』を参照されたい。

（文／編集子）■



幕末

1

幕府陸軍(1)

徳川家

The Army of the Tokugawa Shogunate(1)
The Tokugawa Family

日本は明治元(1868)年、国家制度を改革し、天皇が統治する立憲君主制国家となった。それまでの300年間は徳川氏の支配する封建領主国家で、全国的に統一された国家的軍隊はなく、徳川氏をはじめとする各藩の私兵集団があった。従って幕末の維新戦争はすべて各私兵集団による戦争であった。徳川幕府は天保11(1840)年のアヘン戦争や嘉永5(1853)年のペリー来日などから、外国の侵略に対して近代装束の軍の必要を感じ改革を考えていたが、旧習を守る保守派の抵抗もあって改革は思うように進まなかった。一方、維新戦争の主役であった薩摩藩は文久3(1863)年の薩英戦争で、長州藩は翌年の下関戦争で外国軍に敗れ、その戦訓から急速な軍の近代化を進めていた。この時期は両者ともその軍制が急速に変化したため、軍装の上でも変化が激しく、資料的にも不明な点が多い。正規の国軍の発足は明治2(1869)年なので、日本の近代軍装史はその時期から始まっている。

In 1868, the Meiji era began and Japan was reformed into a nation to be governed by an emperor instead of feudal clans. For the 300 years previous, Japan had been governed by the Tokugawa Shogunate. During that regime, there were no unified national military forces. Instead, every feudal clan (Han) had its own private military forces, including the Tokugawa Shogun ate. Battles which took place during this period in the country's history were between the private military forces of various clans. Based on their experiences in the Opium War in China (1840) and the arrival of Perry's black ships to Japan (1853), the Tokugawa Shogunate perceived the need for a unified, national military force, but conservative elements resisted its creation, and little progress was made. On the other hand, the Satsuma and Choushuu clans, who opposed the Shogunate, modernized their own private military forces rapidly during this time based on their bitter experiences against foreign militaries- the Satsuma-clan was defeated by the English in 1863 and the Choushuu was defeated by an allied foreign force in 1865. The military systems of these groups changed rapidly during the period, and little precise information is available about their uniforms and arms. Japans' national military system started in 1869, and with the formal history of its military uniforms.

天保12(1841)年、武州、徳丸原で訓練をした高島秋帆の私兵軍装

The uniforms and arms of the private military force led by Shuuhan Takashima on maneuvers at Tokumarugahara, 1841.



安政3(1856)年、幕軍近代化のための講武所開設時の軍装

The uniforms of the Shogunate military academy at the founding of "Koubusho", a military modernization academy established in 1856.



嘉永6(1853)年、秋帆の門弟 江川坦庵の定めた軍装

Uniforms designed by Tan-an Egawa, a pupil of Shuuhan Takashima, 1853. やや日本的に変更してある。 A mixed Japanese and Western style.

慶応2(1866)年の将軍、徳川慶喜の軍服(靴を履いている)

Yoshinobu Tokugawa (one of the Tokugawa Shoguns) in military uniform with shoes, 1866.

兵冬衣 (袴の腰板に屯所番号一〜四)
Private in winter uniform. Troop number present on the back of the trousers.

駄荷袋 (弁当や歯磨などを入れる。後にスポンの俗称に変わった)
Large cloth bag (danbukuro) for carrying meals, personal items, etc.

当時の銃は左肩に担ぐのが正式であった。
In those days it was customary to carry the rifle on the left shoulder.

文久3(1863)年、士官の夏衣
Model 1863 officer's summer uniform.

兵夏衣 (布は白呉呂地)
Private's summer uniform.

御持小筒 (将軍用の小銃)
組兵士 (帽正面に小の字)
Shogun's rifle porter.
Service mark on his cap.

陣笠
Battle-hat

騎兵組兵士 (陣笠正面に金で騎の字)
Cavalry. Service mark on his cap.

脇差
しんちゅうどうがねつく (真鍮銅金造り)
Short sword

細袴
Slim trousers

大砲組 (前面に大の字)
Artilleryman. Artillery mark on the front of his battle hat.

歩兵 (笠正面に大隊番号)
Infantryman, Battalion no. on the front of his battle hat.

ソギ袖の陣羽織
Surcoat

歩兵組 (平民の歩兵)
輪つなぎの兵科章
String of circles is his service mark.

股引
Trousers (momohiki)

小筒組 (士分の歩兵)
袴の腰に小菱つなぎの兵科章。
大砲組 (砲兵) は「大」のつなぎ文字
Private in summer cap. The string of diamonds on his waist in his service mark.

歩兵夏服。股引上部が兵種別の染め分けになっている。
Private in summer uniform. Service color was dyed into upper part of the trousers.

慶応2年(1866年)の士官
幕府陸軍歩兵
Shogunate infantry officer, 1866

冬服の後ろ姿。銃の扱いやすい刀の差し方をしている
Back view of soldier in his service mark, winter uniform. Short sword kept in back to avoid inhibiting rifle use.

幕府講武所(幕軍士官学校) Koubusho - the Tokugawa Shogunate's military academy

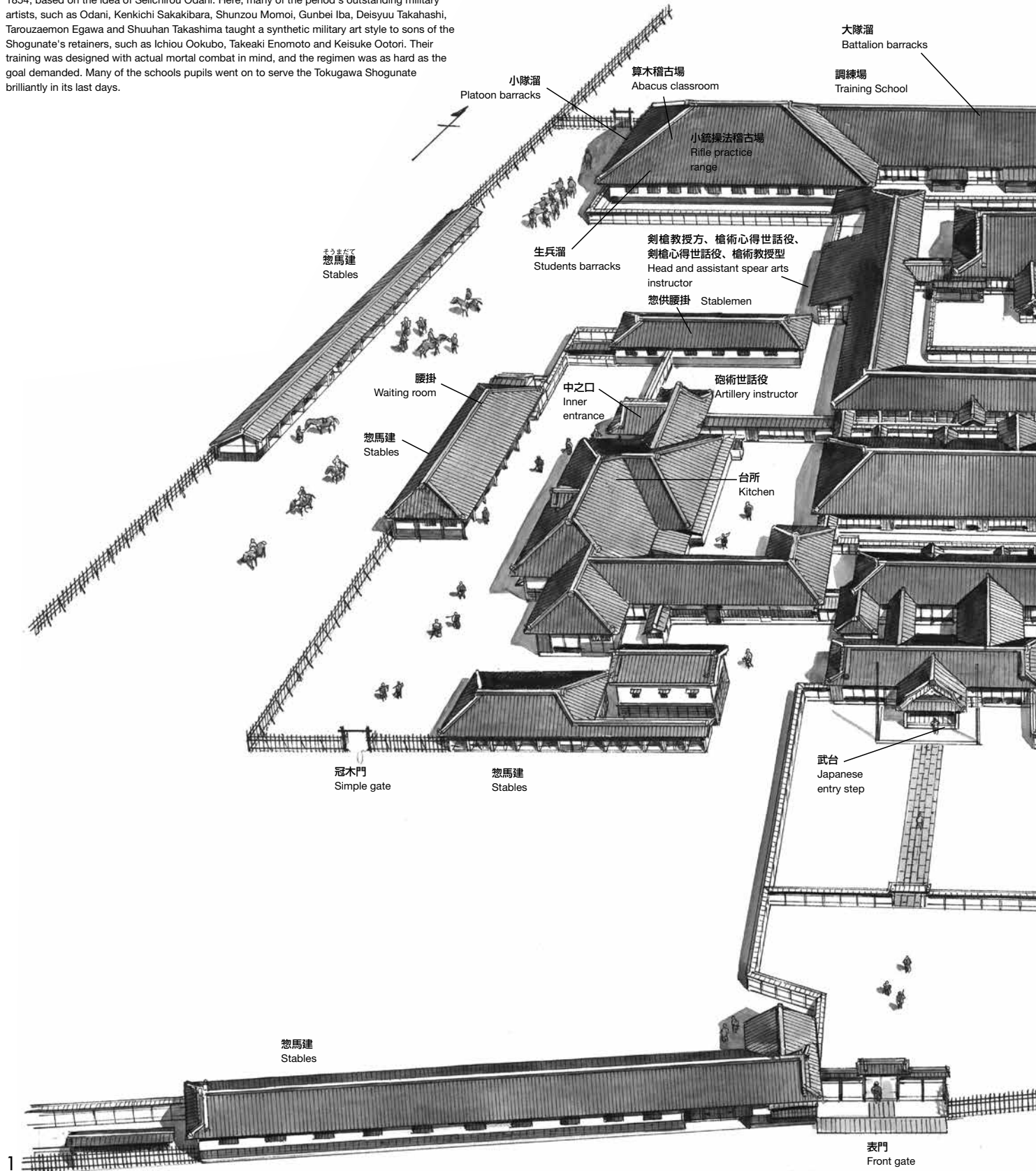
講武所は維新の大波に対処するため、安政元（1854）年12月、築地に建設された幕府の武術総合練習場で、発案者は先手組頭で剣客として名高い男谷精一郎であった。旗本、御家人の子弟を集め、剣術、槍術、柔術、砲術、兵学などの稽古をさせた。

安政3年、ここが軍艦操練所になると、神田小川町（現在の三崎町）へ1万3000余坪（約4.29平方キロメートル余）の地を得て移転した。

実戦を目標にした講武所の稽古は厳しく、気風も荒かったため一般の壁壁を買う面もあったが、時局がら有為な人材を求めている幕府にとって、ここはまさに宝石箱であった。

頭取、男谷精一郎の下に、剣術教授方として神原建吉、桃井春蔵、伊庭軍兵衛、槍術はのちに將軍徳川慶喜に恭順を説いて水戸まで警護し、將軍奪還を担う幕臣に「伊勢守がお守りでは」とあきらめさせた名槍術家、高橋伊勢守政晃（のちの泥舟）。砲術では江川太郎左衛門、高島秋帆など、当時一流の武芸者を擁し、多数の有為な人材を育てあげた。大久保一翁、榎本武揚、大島圭介など、ここ出身で幕末に活躍した者は多い。このことを見ても、危機にあたって有能な人間が、向上心のある人間を育てることがいかに大切か、よく理解できるのではないだろうか。

koubusho was a comprehensive military academy established at Tsukiji in Tokyo in December, 1854, based on the idea of Seiichirou Odani. Here, many of the period's outstanding military artists, such as Odani, Kenkichi Sakakibara, Shunzou Momoi, Gunbei Iba, Deisyuu Takahashi, Tarouzaemon Egawa and Shuuhan Takashima taught a synthetic military art style to sons of the Shogunate's retainers, such as Ichiu Ookubo, Takeaki Enomoto and Keisuke Ootori. Their training was designed with actual mortal combat in mind, and the regimen was as hard as the goal demanded. Many of the schools pupils went on to serve the Tokugawa Shogunate brilliantly in its last days.



幕府軍の笠印

Shogunate troops' hat markings

徳川慶喜の嗜好により洋風軍装が採用されたが、冠物は和式の陣笠であった。士官・下士官の階級は金線と紋で区分された（図の下側が正面）。
For their troops, a western-style uniform was designated by the Shogun Yoshinobu, who was highly fond of Western influences. However, their war hat was the jingasa, a traditional Japanese war hat. For officers and NCOs, their marks were distinguished with gold lines and heraldry. (The front of the hats are at the bottom of the drawings).



徳川慶喜
Yoshinobu
Tokugawa



騎兵組改役下役、歩兵組改役下役、御持小筒組改役下役、大砲組改役下役



騎兵組改役、歩兵組改役、御持小筒組改役、大砲組改役



陸軍奉行、歩兵奉行



騎兵指図役頭取、同勤方、歩兵指図役頭取、同勤方、御持小筒指図役頭取、同勤方、大砲組指図役頭取、同勤方



騎兵指図役下役、同勤方、同並、歩兵指図役下役、同勤方、同並、御持小筒指図役下役、同勤方、同並、大砲組指図役下役、同勤方、同並

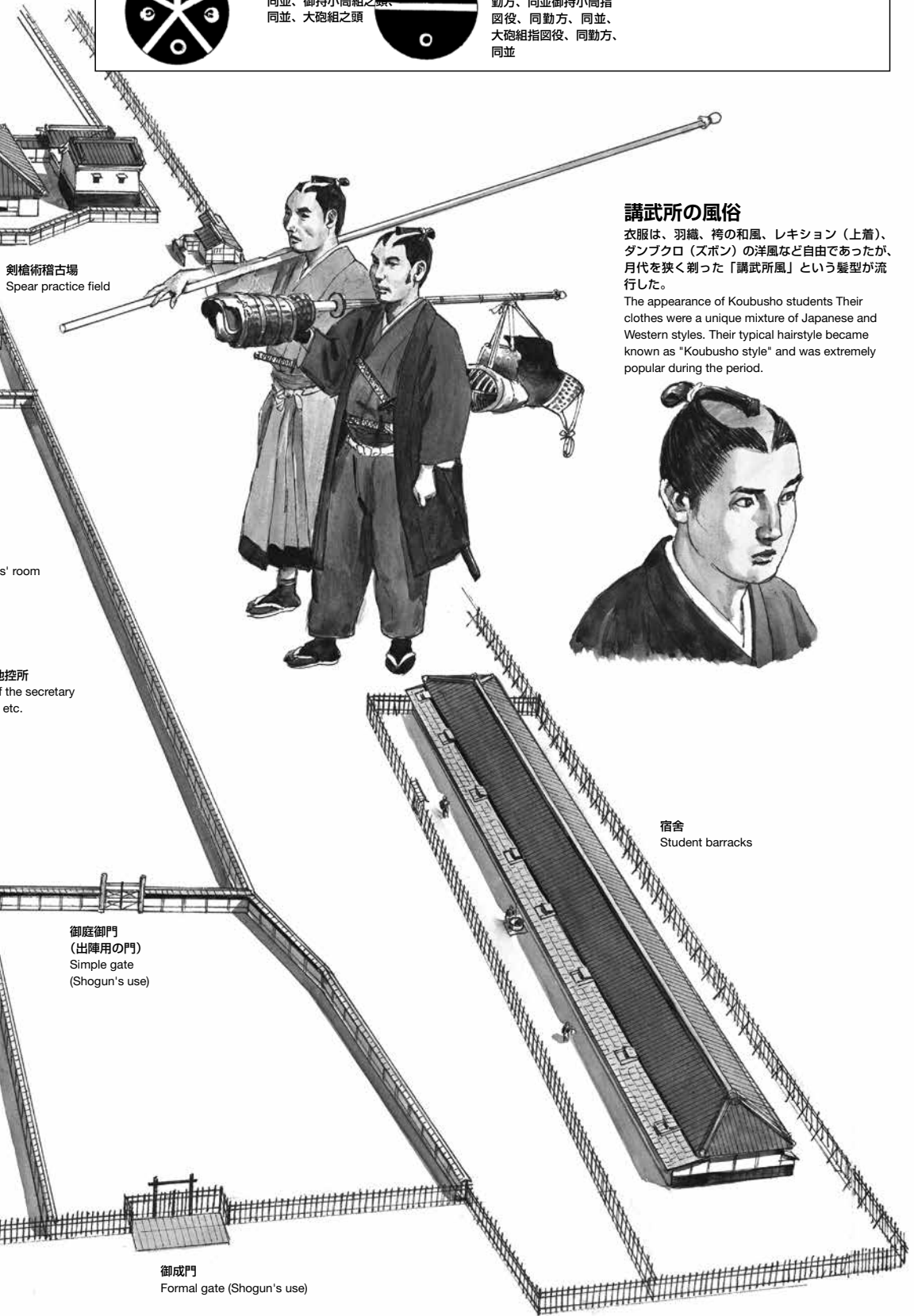


騎兵頭、同並、歩兵頭、同並、御持小筒組之頭、同並、大砲組之頭



騎兵指図役、同勤方、同並、歩兵指図役、同勤方、同並、御持小筒指図役、同勤方、同並、大砲組指図役、同勤方、同並

大砲並太鼓稽古場
Artillery and drum training school



講武所の風俗

衣服は、羽織、袴の和風、レキシヨン（上着）、ダンブクロ（ズボン）の洋風など自由であったが、月代を狭く剃った「講武所風」という髪型が流行した。

The appearance of Koubusho students Their clothes were a unique mixture of Japanese and Western styles. Their typical hairstyle became known as "Koubusho style" and was extremely popular during the period.



宿舎
Student barracks

御庭御門
(出陣用の門)
Simple gate
(Shogun's use)

御成門
Formal gate (Shogun's use)

幕府陸軍(2)

The Army of the Tokugawa Shogunate (2)

徳川幕府軍は、安政元（1854）年、江戸築地に講武所を設け、下級旗本の軍事訓練を始めた。聯隊、大隊、中隊、小隊の制があり、砲兵は1～8小隊までであった。

文久3年、大御番、御書院番、御小姓組、新御番（以上は五百石以上の直参旗本）の中で馬を飼う資力のある者を騎兵隊、無い者を輿詰銃隊とした。小普請、小十人、御徒、御御手、御天守番、能役者、御坊主を小筒組とした。

同年12月、五百石で一人、千石で三人、三千石で十人の割で兵を差し出させ、同時にその給金も支出させた。

年齢17～47才まで、1万余人を集め1～4大隊に編成した。1個小隊40人、3個小隊で1個中隊、5個中隊で1個大隊であった。

大隊長は歩兵頭（少佐）、大隊長補佐（中隊長？）は歩兵頭並（大尉）、小隊長は指図役（中尉）、半小隊長は指図役並（少尉）、下士官教導は指図役下役（軍曹）、押伍（分隊長）には歩兵小頭（伍長）があたった。おそらく1個分隊10人の編制だったと思われる。

このほかに文久元年、外人警固のために作られた特別兵を同3年、別手組とし、外人1人に5人の騎馬兵がついて警護した。

The Tokugawa Shogunate established "Koubusho", a military academy, in 1856 to provide military training for their lower retainers. The troops were organized into regiment, battalion, company and platoon at that time, including, eight platoons of artillery. In 1863, they organized cavalry and infantry by requisitioning men and funds from their retainers based on the size of their stipend from the previous year. The soldiers requisitioned were between 17 and 47 years old and totaled over 10,000, to be organized into 4 battalions. Each platoon was formed from 40 soldiers, each company consisted of three platoons, and each battalion consisted of five companies. According to the rank system, a battalion commander was a Major, a company commander a Captain, a platoon leader a First Lieutenant, a semi-platoon was commanded by a Second Lieutenant, an instructor of the lower officers a Sergeant and a Squad a Corporal. One squad probably consisted of 10 soldiers. In addition, the special services for foreigners introduced in 1860 designated that each foreigner was to be guarded with 5 cavalrymen.

慶応2（1866）年、歩兵将校 infantry officer, 1866



慶応3（1867）年 フランス式装備の軽騎兵 Hussar with French harness and uniform, 1867



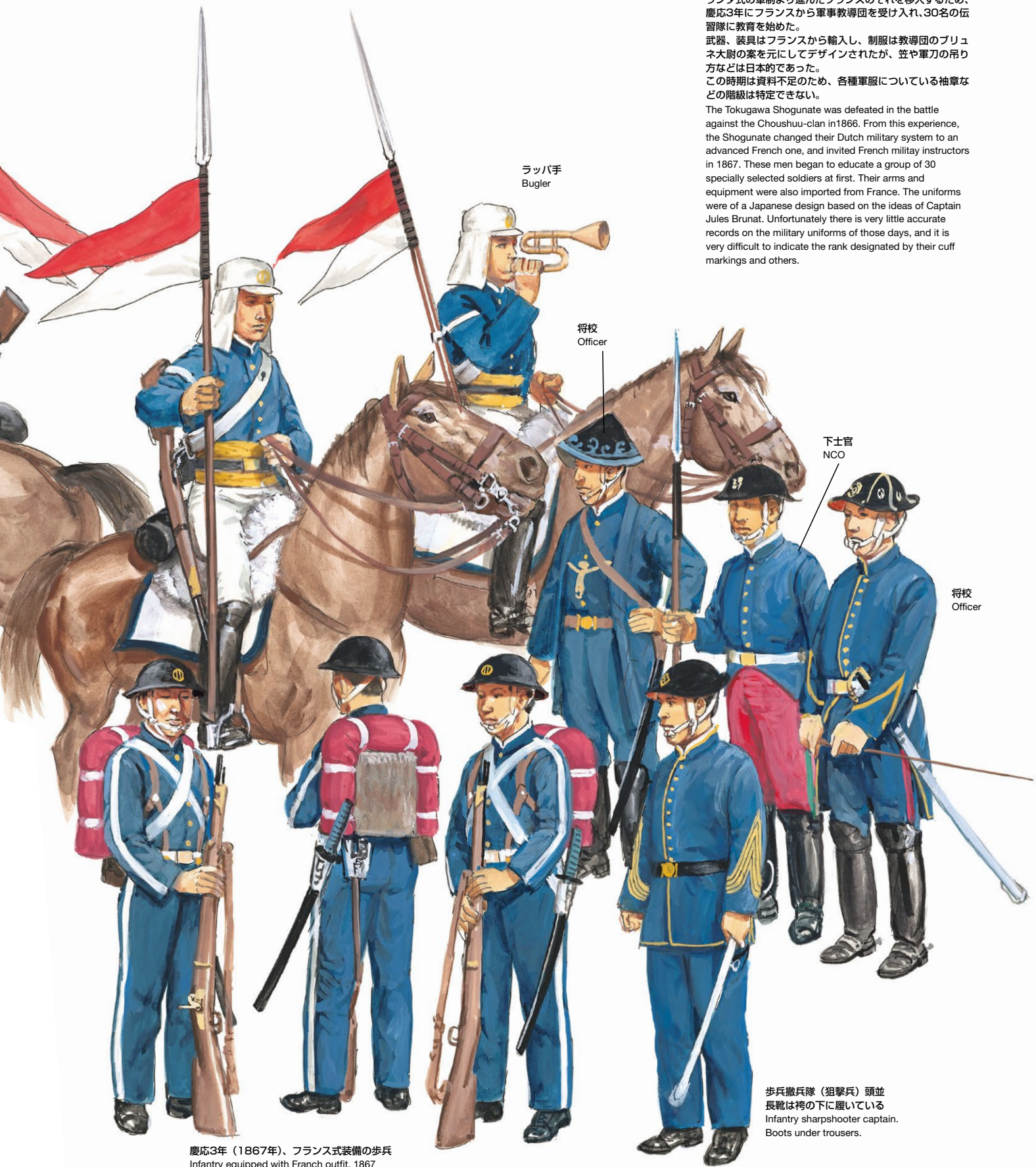
当時の最新兵器の連発式拳銃を持っている。 A revolver, the latest repeater at the time.



文久3年、組合銃隊軍楽隊鼓手 Military drummer and fusilier's motley, 1863

慶応2（1866）年、歩兵第1聯隊の軍旗旗手（おそらく少尉） 1st Infantry regiment bearer, 1866. Probably a second lieutenant.

歩兵兵士 腰の白い袋は小型の雑囊 Infantryman. The white bag on his waist is a small gunnysack.



幕府は慶応2（1866）年の征長戦争に敗れ、今までのオランダ式の軍制より進んだフランスのそれを移入するため、慶応3年にフランスから軍事教導団を受け入れ、30名の伝習隊に教育を始めた。
 武器、装具はフランスから輸入し、制服は教導団のプリユネ大尉の案を元にしてデザインされたが、笠や軍刀の吊り方などは日本的であった。
 この時期は資料不足のため、各種軍服についている袖章などの階級は特定できない。

The Tokugawa Shogunate was defeated in the battle against the Choushuu-clan in 1866. From this experience, the Shogunate changed their Dutch military system to an advanced French one, and invited French military instructors in 1867. These men began to educate a group of 30 specially selected soldiers at first. Their arms and equipment were also imported from France. The uniforms were of a Japanese design based on the ideas of Captain Jules Brunat. Unfortunately there is very little accurate records on the military uniforms of those days, and it is very difficult to indicate the rank designated by their cuff markings and others.

ラッパ手
Bugler

将校
Officer

下士官
NCO

将校
Officer

慶応3年（1867年）、フランス式装備の歩兵
Infantry equipped with French outfit, 1867

歩兵撤兵隊（狙撃兵）頭並
長靴は袴の下に履いている
Infantry sharpshooter captain.
Boots under trousers.

フランスのナポレオン3世は教官団と共に歩兵用としてシャスポー銃2,000挺と装具、野砲、山砲を2個中隊分（各12門）とその要員の軍装一式、20頭のアラブ馬とその馬装を贈った。

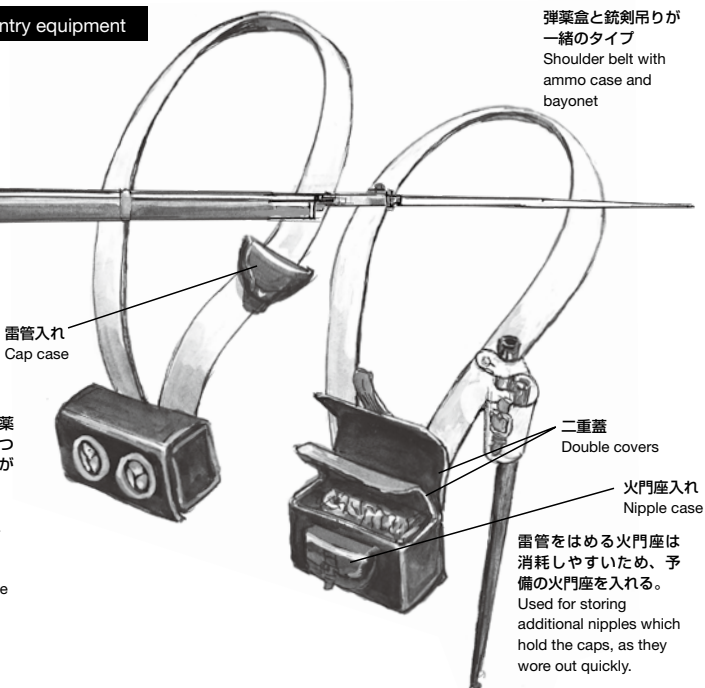
Along with the group of instructors, Napoleon the 3rd also sent 2,000 Chassepot guns and equipment, 12 mountain and field guns (for two companies), the equipment for the gun crews and 20 Arabian horses and their equipment to Japan.

幕末、歩・騎兵の装具 Arms and uniforms of the Shogunate's infantry and cavalymen

歩兵装具 Infantry equipment



横浜居留地の幕府警備兵で、弾薬盒と銃剣吊りが一緒のタイプをつけている。初期の歩兵銃は銃剣が銃身の横についている。
A garrison infantryman in the foreign settlement in Yokohama. Notice his unit belt with both ammo case and bayonet. On early models of infantry rifles, the bayonet was set to the side of muzzle.



弾薬盒と銃剣吊りが一緒のタイプ
Shoulder belt with ammo case and bayonet

二重蓋
Double covers

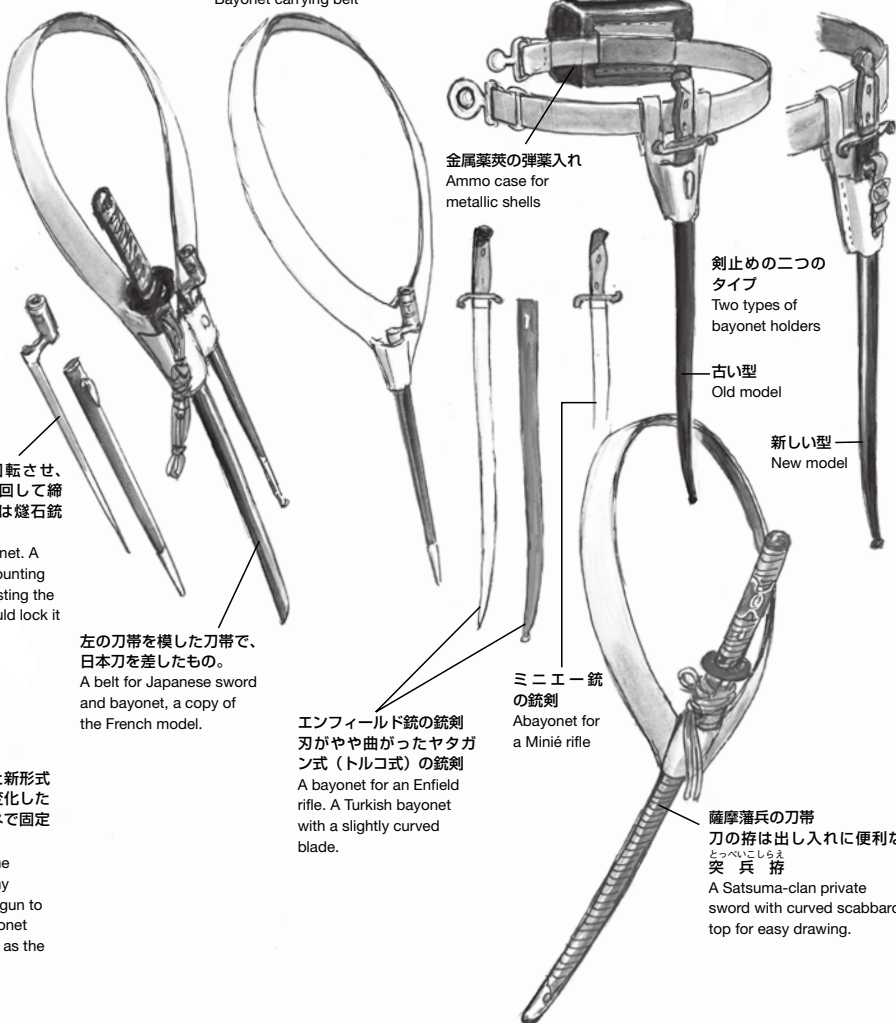
火門座入れ
Nipple case

雷管をはめる火門座は消耗しやすいため、予備の火門座を入れる。
Used for storing additional nipples which hold the caps, as they wore out quickly.



1814年頃のフランス軽騎兵
刀帯と銃剣吊りが一緒のタイプ
Shoulder belt with sword and bayonet. A French light cavalryman from about 1814.

銃剣吊りのみのタイプ Bayonet carrying belt



ソケット式銃剣
差し込んで半回転させ、銃口のハングを回して締める。この形式は燧石銃のもの。
A socketed bayonet. A half-turn after mounting coupled with twisting the muzzle hang would lock it into place.

左の刀帯を模した刀帯で、日本刀を差したもの。
A belt for Japanese sword and bayonet, a copy of the French model.

エンフィールド銃の銃剣
刃がやや曲がったヤタガン式（トルコ式）の銃剣
A bayonet for an Enfield rifle. A Turkish bayonet with a slightly curved blade.

ミニエー銃の銃剣
Abayonet for a Minié rifle

刺止めの二つのタイプ
Two types of bayonet holders

古い型
Old model

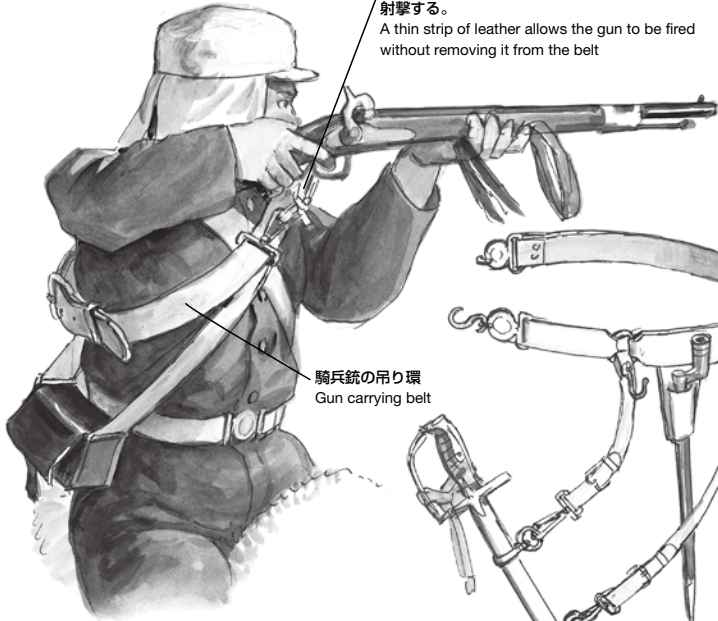
新しい型
New model

薩摩藩兵の刀帯
刀の拵は出し入れに便利なたつたしらす突兵拵
A Satsuma-clan private sword with curved scabbard top for easy drawing.

幕末から明治にかけては、各国の小銃開発期であったため、次々と新形式の小銃が登場した。弾丸の装填法も銃剣の装着法もそれに従って変化したので、たくさんの種類があった。銃剣を銃口の下に差し込み、バネで固定する方式が定着したのは明治に入ってからであった。
In the period of the last days of the Tokugawa Shogunate through the beginning of the Meiji era, various rifle were being developed in many countries. Loading and bayonet mounting procedures differed from gun to gun, creating numerous variations. The system of mounting the bayonet under the muzzle with a spring was finally fixed early in the Meiji era as the preferred method.

騎兵装具 Cavalry Equipment

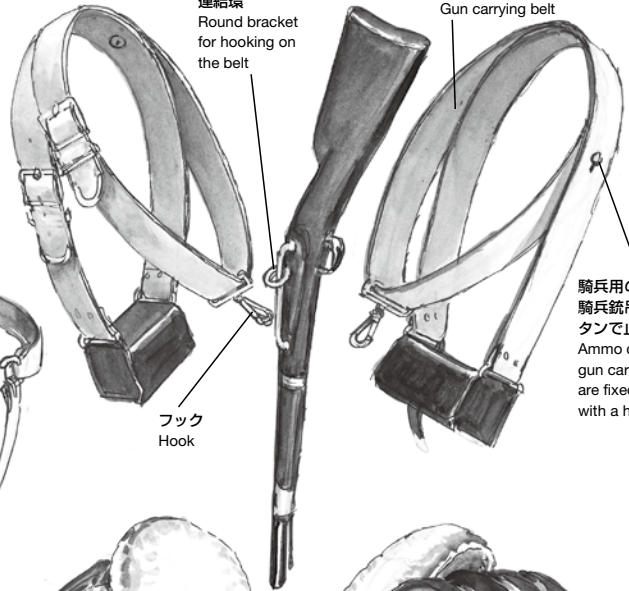
騎兵銃の吊り環のフックに細い皮紐をつけてゆとりを持たせ、銃を外さずそのまま持ち上げて射撃する。
A thin strip of leather allows the gun to be fired without removing it from the belt



騎兵銃の吊り環
Gun carrying belt

連結環
Round bracket for hooking on the belt

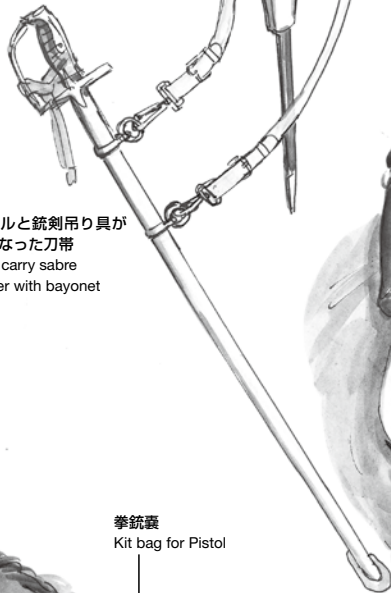
騎兵銃吊り環
Gun carrying belt



フック
Hook

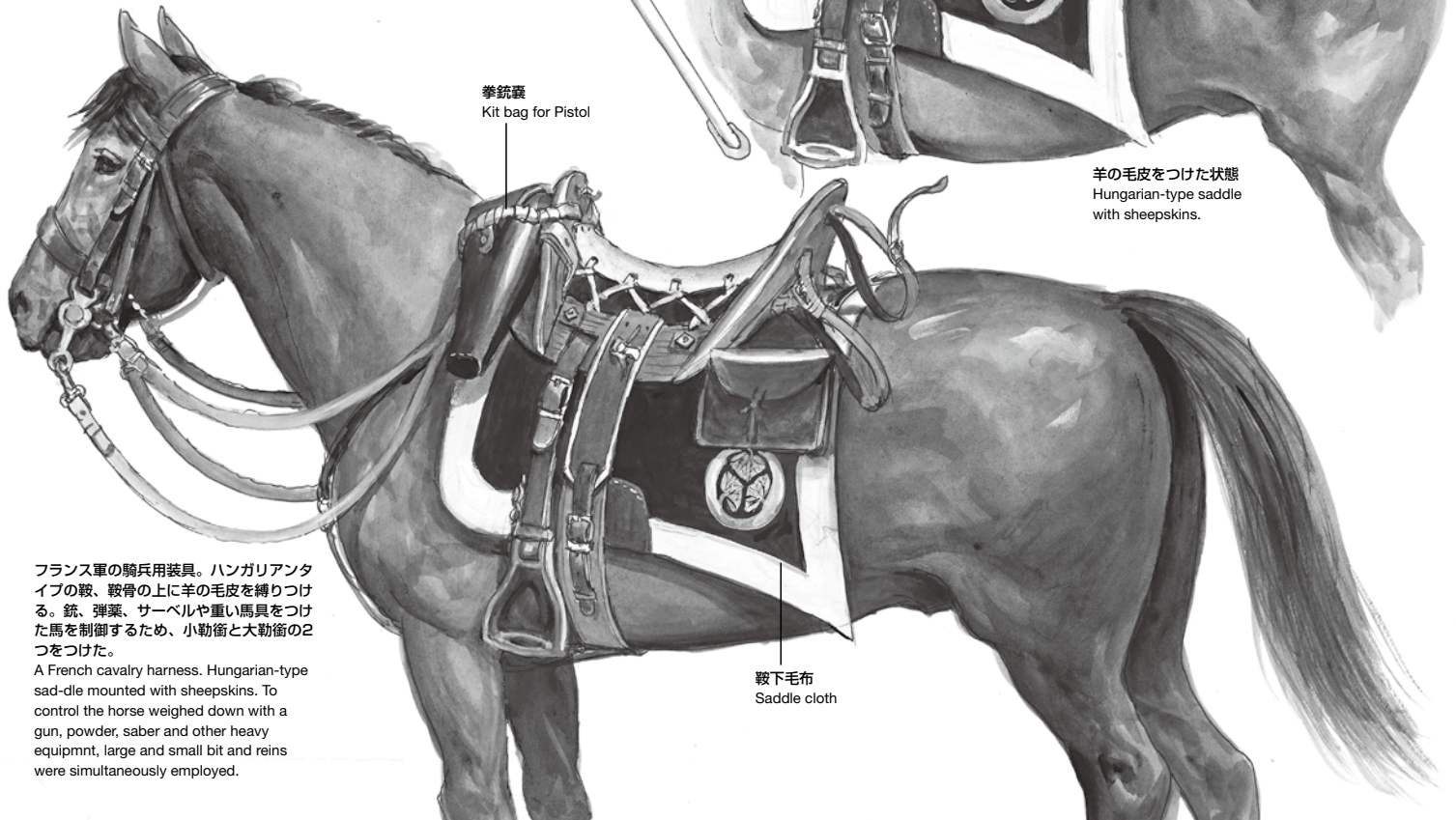
騎兵用の弾薬盒と騎兵銃吊り環はボタンで止めてある。
Ammo case and gun carrying belts are fixed together with a hook

サーベルと銃剣吊り具が一緒になった刀帯
Belt to carry sabre together with bayonet



羊の毛皮をつけた状態
Hungarian-type saddle with sheepskins.

拳銃囊
Kit bag for Pistol



鞍下毛布
Saddle cloth

フランス軍の騎兵用装具。ハンガリアンタイプの鞍、鞍骨の上に羊の毛皮を縛りつける。銃、弾薬、サーベルや重い馬具をつけた馬を制御するため、小勒衝と大勒衝の2つをつけた。
A French cavalry harness. Hungarian-type saddle mounted with sheepskins. To control the horse weighed down with a gun, powder, sabre and other heavy equipment, large and small bit and reins were simultaneously employed.

ISBN978-4-499-23376-7 C0076 ¥3800E



9784499233767

定価 (本体3,800円+税)



1920076038006



新装版

日本の軍装

幕末から日露戦争